

「ぶとう会に、間に合うといいわ」と、女の子が答えました。「ドレスに、トケイソウの花が、ししゅうされるように注文したのよ。でもおはりこは、とってもなまけ者だから」ツバメは川をこえ、船のマストにかかっているランタンを見ました。ツバメは、ひんみんがいをこえ、老いたユダヤ人たちが商売をして、どうの天びんで、お金をはかり分けるのを見ました。やっと、あのまずしい家にたどり着くと、ツバメは中をのぞきこみました。男の子はベッドの上で、熱のためにね返りをうち、お母さんは、つかれ切ってねむりこんでおりました。ツバメは中に入って、テーブルの上にあるお母さんの指ぬきのわきに、大きなルビーを置きました。それからツバメは、そっとベッドのまわりを飛び、つばさで男の子のひたいをあおぎました。「とてもすずしい」と、男の子は言いました。「ぼくは、きっと元気になる」そして、ここちよいねむりに入っていきました。それからツバメは、幸福の王子のところに飛んでもどり、やったことを王子に伝えました。「みょうなことに」と、ツバメは言いました。「こんなに寒いのに、ぼくは今とても温かい気持ちができるん

です」「それは、いいことをしたからだよ」と、王子は言いました。そこで小さなツバメは、考え始めましたが、やがてねむってしまいました。考えごとをすると、ツバメはいつもねむくなるのです。朝になると、ツバメは川のところまで飛んでいき、水浴びをしまし